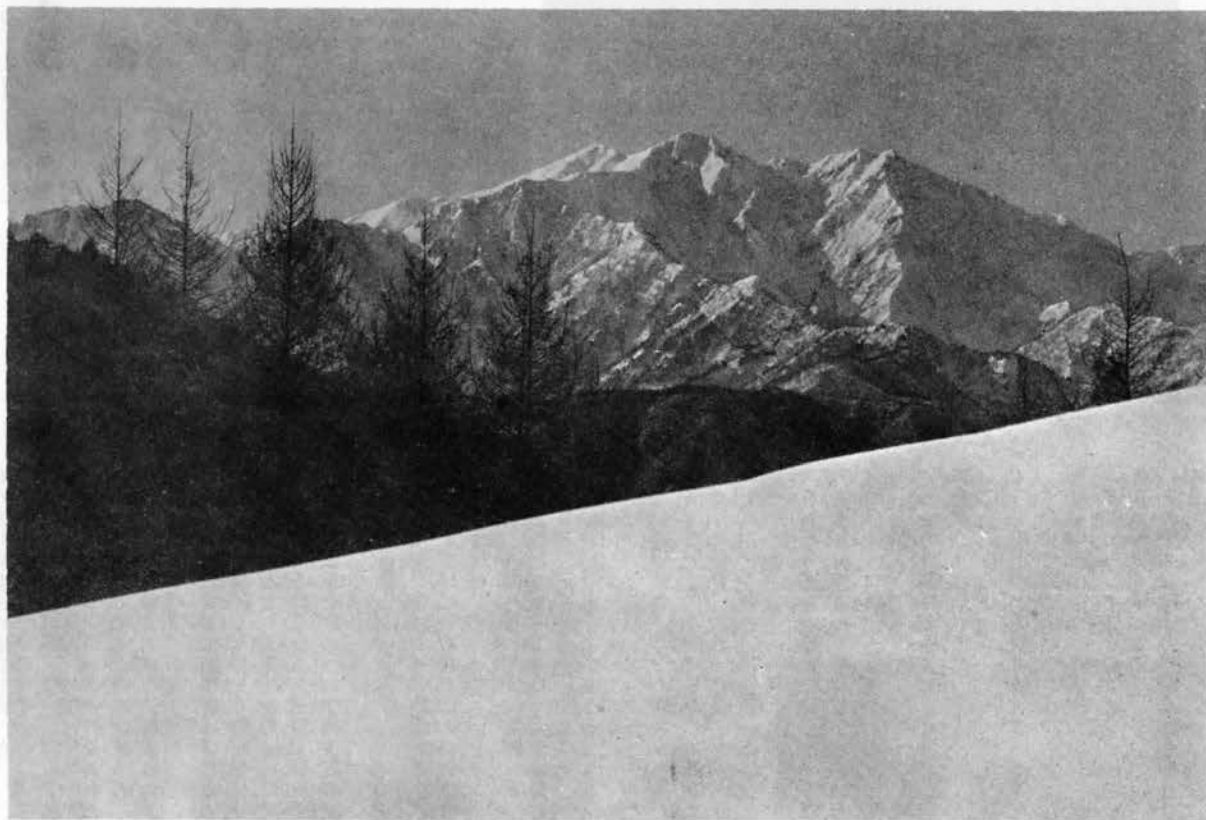


# 山と博物館

第19巻 第1号 1974年1月25日 大町山岳博物館



鎗ヶ岳

撮影 要沢 要

## 文化財保護行政の改善強化を望む

自然を愛し歴史を尊ぶ心は、敗戦後の思考の変化に加えてここ数年の経済の高度成長に伴う政治、社会の急変によって著しく低下した。余り重要でない遺跡は破壊されても止むを得ない。しつかり調査しておけばよい。「開発は現在の生活を豊かにするのだから遺跡が多少こわされても仕方がない」といった声があることは否定できない。埋蔵文化財の破壊の原因である開発の急速な発展に対して、これを守る立場にある文化財保護行政はなお著しく立ちおくれしているといわざるを得ない。国、県ともに行政の努力の多くの部分が、頻発する破壊に対処する緊急措置としての事前調査行政発掘に向けられ、文化財保護行政の本来の任務と云うべき措置を講ずる点では、必ずしも十分な機能を果し得ないでいる。もちろん緊急調査の体制を強化することも必要であるが、破壊を未然に防ぐための事前協議やきめ細かな行政指導を行なう体制をより大幅に強化しなければ、破壊の増大を食い止めることはできないであろう。最近の行政指導の特徴として、県が大綱だけ立案し、その実施を市町村におしつけてしまうというやり方が出ている。史蹟指定の促進とそれを裏づける史蹟買い上げは、現在国が力を入れている文化財保護対策の一つであるが、年間約十四億円という買上補助金では、現下の要請に対しては少ない額である。現在の土地価格で、すでに指定されている史蹟の現状変更を防ぎ、環境を整備するために必要な未買収部分を買収するだけでも約六〇〇億円以上を要するということからみても、予算が余りに僅少なこととは明白であろう。現行の保護法は建設による埋蔵文化財の破壊を規制する点ではきわめて不十分である。現在の文化財行政は法の不備を、世論の力と開発側の良識によって補っているのが実情である。速やかに許可制に改めることが困難な場合も、少なくとも届出義務の不履行に対する罰則の強化と非常手段としての工事中止命令権を認める方向で改正が行なわれるべきである。

(大町市教育委員長 五十嵐水卯)

# 冬山へのアプローチ — 大町山の会の場合 —

## 1. 研 修

清 沢 浄

夏山の沢から壁への集中合宿が無事に終了し、定例木曜会で反省会が行なわれた後、会員個々の間で今年の冬山はどこへ行こうかとささやかれた。

また、会の研修担当者は冬山へむかっつての木曜研修会のスケジュールの立案を急いだ。

8月23日の木曜会で9月から12月までの定例木曜会の利用を次のように決定した。

- 1、月の第1週の木曜会は定例木曜会とする。
- 2、第2、第3週の木曜日は冬山研修会とする。
- 3、第4週の木曜日は海外研究会とする。

9月6日の定例木曜会において研修担当者より、9月から12月までの木曜研修会ならびに冬山トレーニング合宿のスケジュールと、各テーマの担当が発表され、各担当者は準備にとりかかった。

また、冬山トレーニング合宿の参加申込みを11月1日に締切することを決定した。

その頃、中堅クラスの会員5、6名が集まって、今年の越年に不帰尾根のトレースをしたいという計画が出され、リーダー会と連絡をとりながら計画を進めることになった。

不帰尾根を計画した会員は12月までのトレーニング山行、そして、山城研究のスケジュールを独自にたて、それらの計画に出席できない場合は不帰尾根のメンバーからはすすという厳しい約束をして計画をスタートさせた。

もうひとつ、スバリ岳西面の登攀から縦走という計画も提出され、2、3名の会員によって準備が進められた。ここで研修会の内容

を簡単に記しておこう。

9月13日

第1回の木曜研修会の前半を受持つて、降旗厚会員により、冬山へ向つてのトレーニング方法ということで、いかにしたら効率のよい体力トレーニングができるか説明がなされた。降旗会員はともかく毎日少しでも体を動かすよう力説した。

その後、武田会長を囲んでチームワークについて、過去の経験談をもとにいろいろと話



八方尾根より不帰尾根

がだされ第1回研修会を終った。

9月20日

武田睦男会員により気象について、特に天気図作成のトレーニングが行なわれた。

講師が用意してきた用紙が配られ、テープレコーダーに録音された気象通報により天気図を作成した。

新人の中には天気図作成ははじめてという人もおり、講師から詳しく説明を受け、冬山までには新人でも天気図から明日の天気予想ができるようになることを望まれた。

また、気象全般については後日時間を持つ事を約束した。

9月27日

白沢慎介会員により、救急処置法についてプリントされたテキストにそつて説明、実習が行なわれた。

各自、自宅へ帰つてから実際にあつた時あつてのことのないように、よく練習しておくことと言われて研修会を終った。

10月11日

浅川とみ子会員により、山での食生活について討論された。はじめ講師が用意してきたテキストにより学校の家庭科の授業のようなカリキュラム、また、ビタミンがどうのタンパク質がどうのと、昔を思いだしながら皆頭をかかえていた。

それから個人山行等の時など、各自どのような食料計画をたてているか、各個人の意見を聞きデイスカッションをした。

10月18日

当会の遭難対策委員である伊藤弘会員を囲み遭難防止について話し合う。

山岳保険について、また、緊急連絡方法、トランシーバーの利用法について話しあう。

その中で緊急連絡方法は冬山までに、伊藤会員が中心になって確立させる事、また、山岳保険については今後一本化し入山者は全員保険をかける事にする。

その際の保険金の受取人は会長とすること等が決められた。

10月25日

一昨年、昨年の研修会に続き、長沢修介会員が雪崩についてテキストを用いて説明する。今年には新人、中堅を主体にわかりやすく講義されたので、特に新人にはよい勉強になったと思われる。

11月8日

9月20日に引き続き、武田睦男会員より気象全般について、テキストをもとに講義を受ける。冬山における天候の判断は、その山行の成否をにぎるだけでなく、遭難にも結びつくので、皆一生懸命であった。

11月15日

研修場所を県立山岳総合センターに移し、新人と中堅とに別れて研修をする。新人のグループでは、松原会員が、冬山で使われるいろいろな装備の使用用途や使用方法について説明し、またこれから用具を買いそろえる会員に対しては、アドバイスを行なった。中堅クラスは、不帰山域に集中して、柳沢豪会員を中心に山城研究を行なった。

今回をもって、冬山にむかっつての木曜研修会を終り、11月28日より4日間、山岳総合センターにおいて、冬山トレーニング合宿に入る事となつた。

合宿のスケジュールは、夜8時から10時30分までA班とB班に別れて研修会、そして朝6時起床、降旗会員が担当して5、6キロメートルのランニングが組まれた。A班、B班の選択は各個人に任せ、聞きたい方へ出席するようにして行なわれた。

11月28日

ここで合宿の内容を簡単に記してみたい。

A班は太田百合子会員をチーフに、松原会員をアドバイザーにして、ワカン、アイゼンの付け方、固定バンド等について実地練習、そして冬山における地形および気象的設営条件について、デイスカッションを行なった。受講者は夜遅くまで、より速くアイゼン・ワカンの着脱ができるよう、熱心に練習していた。B班は倉下会員を中心に、冬山での岩登



I峰尾根第1ジャンクションとII峰

り技術、確保について、特に確保また支店について、深く掘り下げて討議された。

11月29日

A班は小西けい子会員を中心に、雪上確保、ザイルワーク、そして冬の張り方について、デイスカッションを行なった。冬の張り方については、過日部室において降旗会員に指導を受け、また武田会長の指導のもとに、黒沢尾根で実地訓練を行なったので、その時の反省を含めて行なわれた。B班は清沢会員を中心に、ピバーク法と装備の研究を行なった。その中で、特に装備については、今後使われるであろうユマールを、実際にザイルをたらし行なってみた。またピバーク法については過去の経験により、いかにしたら寝具を濡らさないようにして、快適な生活をするか、にしばってデイスカッションをした。

11月30日

A班は浅川会員、松原会員を囲んで、冬山

での生活技術、特に初めて冬山に入る人のために、細かな事まで含めてのデイスカッションを行なった。B班は、冬山、特に岩登り中における手足の凍傷防止について、武田会長をアドバイザーに迎えて、デイスカッションを行なった。A班、B班の研修が終わってからのリーダー会のメンバー4名が集まり、今年の冬山計画を話し合い、12月4日に開かれるリーダー会の原案をねった。

12月1日

参加者全員で、研修中に行なわれた内容についての質疑応答が行なわれ、それから、会員相互の親睦を深めようと、ささやかな親睦会を行なって、合宿を終った。

会員個々が計画してきた冬山山行計画を、12月4日にリーダー会を開き、検討することになった。合宿中に、一部リーダー会のメンバーにより作られた原案に基づき検討され、次の通り決定された。

- 入山日 12月31日～1月6日  
不帰I峰尾根→五竜岳→遠見尾根下降
- L. 清沢、降旗、柳沢豪、奥村
- 入山日 1月1日～1月5日  
スバリ岳西面登攀→爺ヶ岳→同南尾根下降
- L. 柳沢昭夫、松原、倉下、浅川とみ子
- 入山日 1月1日～1月4日  
屏風尾根→爺ヶ岳→爺ヶ岳南尾根下降
- L. 久保田、山口、要野、日堂、奥原
- 入山日 1月1日～1月4日  
爺ヶ岳南尾根→爺ヶ岳→同南尾根下降
- L. 武田武、渡辺、横内、堀田、桜井
- 入山日 1月1日～1月4日  
鹿尾根→爺ヶ岳→同南尾根
- L. 太田、矢口、小西
- 入山日 12月29日～1月4日  
(矢口のみ1月1日下山)

鹿尾根隊は、1月1日に矢口隊員が南尾根を下降、残りの太田・小西は、爺ヶ岳南尾根で武田隊に合流し、1日以後は、武田隊と行動を共にする。

12月6日の定例

木曜会において、リーダー会より冬山合宿の説明があり、質疑応答が行なわれた。その後入山までの木曜会の利用法は、13日・20日は各パーティーにわかれて検討・打ち合わせ、27日は全員で最終検討会とし、また各リーダーは、10日まで計画書を企画係へ提出する事に決定した。12月10日に、長野県山岳協会



下部岩壁

中信支部の冬山検討会があり、会からも数名が出席をして、計画の概要を説明した。

12月13日、20日は、各パーティー個々に打ち合わせが行なわれた。その中で、矢口隊から、鹿尾根の最上部にクローアルと岩場があり、女子会員には少し不安があるので、ルートは鹿尾根から新越尾根に変更したいと申し出があり、了解された。

12月27日は、緊急連絡方法についての説明があり、山岳保険への加入が行なわれた。そして、各隊にわかれ、装備等の分配が行なわれ、また、清沢隊のメンバーである奥村会員が27日、交通事故を起してしまつたとの連絡があり、急いで清沢会員が自宅へ連絡をとつた結果、怪我はたいしたことではないが、今回の山行は無理との事であった。そこで急遽リーダー会と相談して、かねての計画を三名で実行することに決定し、お互いに健闘を誓い合つて、今年最後の木曜会をおえた。

ここで、冬山山行のためのトレーニング、山行の一部を紹介する。

9月15日～16日の2日間、不帰I峰尾根を計画中の柳沢豪会員をチーフに、他3名により偵察山行(八方尾根→唐松岳→八方尾根下

降)を実施し、I峰尾根の、特に断壁付近および下部岩壁付近の概念図作製、また写真を撮影してきた。

11月3日～4日の2日間、清沢会員をチーフに、柳沢豪、小西会員の3名で、富士山で雪上訓練山行を行なう。雪の量は少なかつたが、八合目付近より、よくクラフトした雪上で、トレーニングをしながら頂上へ行つてきた。

11月23日には、武田会長をチーフにしたパーティーは、新人6名により、冬の張り方ラッセルワーク、ザイルワーク等のトレーニングをしてきた。また他のパーティーは、11月23日～25日までの3日間、清沢会員をチーフに、他2名により、不帰I峰尾根の積雪期の偵察山行を行なった。(八方尾根→唐松岳→I、II峰間コル) 25日は悪天であったが、無事目的を達成し、下山した。

12月2日、合宿終了の翌日、柳沢豪会員をチーフに、他8名によりラッセルトレーニングが行なわれた。

越年山行の記録は紙数にも限りがあるのでここでは、不帰I峰尾根隊の記録のみにとどめる。(次号につづく)(大町山の会会員)

# 山岳博物館入館者実態調査について

降旗英子

大町山岳博物館における入館者数は全国的な旅行ブームにより近年次第に増加してきた。今年度は特に当館が観光ルートにのつたことから、その傾向が著しかった。入館者の大部分が旅の人であることは以前から知られているが、どの地方から来た人か、何歳ぐらいの人かなど、その実態はほとんど明らかにされていない。そこで今回、入館者の最も基本的な実態を知るために、次の項目についてアンケート調査を行った。

- ①性別 ②年齢 ③職業 ④住所 ⑤一緒に来た人 ⑥大町山岳博物館に来た動機 ⑦大町山岳博物館を何によって知ったか

〔調査方法および期間〕  
入館者が多く、比較的落ちついた九月、十月を対象期間とし、そのうち、祝日一日、日曜日二日、土曜日三日、平日四日、計十日を選び実施した。対象は大人個人券による入館者である。受付で大人個人券に合せてアンケート用紙を配布し、付属動物園にぬける出口の所に記載所を設け、投入箱を置いておいた。

### 〔調査結果および考察〕

アンケート用紙配布数は九五八、使えるアンケートは五一三で、回収率は五三・五％であった。そのうち男性二九一名、女性二二二名で、その比率は男性五七％、女性四三％と、男性入館者がやや多い傾向を示した。

年齢別に見ると、大人券入館者の約半数が二〇歳代の人であった。特に女性の場合は、約六〇％が二〇歳代の人であり、そのうちの八五％は二〇歳―二四歳の人である。その後、三〇代、四〇代と年齢が増すごとに利用者は減少する。

これらの人々が、どのような職業についているかを自由記述によって答えてもらった。その結果、全体的には会社社員が四一・七％と一番多く、ついで主婦など無職二二・三％、学生一一・一％の順であった。これを性別に見ると、男性では会社社員と公務員で約六割を占め、女性では会社社員の次には無職、学生の順で多く、これら三項目で女性入館者の七割を占めている。

| 住所   | 性別  |     | 計   |
|------|-----|-----|-----|
|      | 男   | 女   |     |
| 大町市内 | 9   | 8   | 17  |
| 長野県内 | 56  | 31  | 87  |
| 長野県外 | 223 | 182 | 405 |
| 無答   | 3   | 1   | 4   |

表Ⅰ 入館者の住所別内訳

入館者の住所別内訳を示したのが表Ⅰである。これによると、大町市在住の入館者が三・三％であるのに対して、県外者は全体の約八割を占めている。県内者は一七・〇％で、大町山岳博物館入館者の大部分は、大町市以外の人であることがわかる。調査期間中は紅葉の時期であり、散歩にやってくる大町市在住者とわかる人々が多数見うけられたが、入館する人はきわめて少ないようである。本館前庭は眼下に大町市街や安曇平の田園風景を望み、周囲にめぐらされた北アルプス連峰の四季折々の美しさを味わうのには絶好の場所であるため、裏山の付属動物園とともに、市民には博物館よりもむしろ大町公園として親しまれている。

次に県外者の場合、どの地方から来る人が多いのであろうか。結果は関東地方が四八・三％で最も多く、次いで近畿地方二一・五％、東海地方一三・八％であった。関東地方が多いのは、大町への交通の便が比較的良好いと

と、人口が多く、しかも若い年齢層の者が多いためであろうと考えられる。

「誰と一緒に来たか」という項目については、約六割の人が友人と一緒に来ており、ついで家族、その他の人という順で多いが、いずれにせよ、一人で来る人が一割弱であるのに対し、約九割の人は複数で来館することがわかった。友人と来た場合、全般に二人づれが多く、次いで三人づれとなっている。女性の場合は特に二人づれが多く、友人と来館した者の約四割を示している。

| 動機別         | 性別  |     | 計   |
|-------------|-----|-----|-----|
|             | 男   | 女   |     |
| 旅行の途中       | 195 | 157 | 352 |
| 登山にきて       | 34  | 24  | 58  |
| 散歩にきて       | 16  | 13  | 29  |
| 本館の見学を目的として | 28  | 22  | 50  |
| その他の        | 16  | 4   | 20  |
| 無答          | 2   | 2   | 4   |

表Ⅱ 入館者の動機別内訳

当館に来た動機については、表Ⅱに示すように「その他」も含め五つの選択肢をもうけ答えてもらった。旅行の途中という人が全体の約七割を占め、これらの人々はいわゆる観光客と考えられる。その他という人は「人に紹介したり案内するため」「写真を撮りに来た」等である。

大町山岳博物館では、特に積極的なP・Rは行っていないのであるが、今回の調査では、三七％の人が知人や友人によって当館を知り、三三・五％の人は観光案内書によって知ったという結果が出た。新聞、ラジオ・テレビ等、マスコミで知った人は九・二％であるが、これは中国へ贈られたカモシカ関係のニュースが大きな影響を与えたのではないかと考えられる。その他、カラシの運転手、民宿の人など地元の人から聞いて来館した場合や、山岳関係、動物飼育関係、博物館関係の出版物によって知ったような場合もある。

以上の七項目のほかに、観覧して特に印象に残ったものと、当館に対する意見・希望を自由に書いてもらった。

特に印象に残ったものは、人それぞれであるが、書かれていたもの総てを拾いあげ、各展示室、コーナーごとにまとめてみると、山

岳遭難防止コーナーが割合多くの人にあげられていた。悲惨な写真や無残な遺品が、山岳遭難の恐ろしさを人々に強く訴えたのである。

山岳博物館に対する意見・希望で、博物館の存在に関するものでは、「市民の願いでできたという目的がよく、このような博物館があるのを嬉しく思う。来てよかつた。大切に保存してほしい」「旅の者には有意義な施設である」等があった。設置場所に関しては、「静かな公園のような現在の様子を保つてほしい。設置場所としては非常によい。周囲の風景が素晴らしい」という反面、「駅から非常に離れていて困った。バスを通してほしい」などという意見もあった。展示内容については、「よく整理できていて見やすい。説明がていねいだ」というのに対し、人によっては「もっとていねいな説明がほしい」というのもあった。「写真を新しいものに変えられないか」等の資料の古さが指摘されていた。その他には、「日本登山史に関する資料をそろえてほしい。植物、昆虫に関する資料が少なすぎていて。テーマをはっきり決めた方がよい。」等があった。設備等に関する意見・希望では、「展示室の照明を明るくしてほしい。」「建物がいよい。維持してほしい。建物が周囲の風景にマッチしていいよ。」「館内が寒くてよく観覧できない。」「説明員がほしい。」「タイプによる説明がほしい」等があった。

今回の調査では、調査対象が非常に限られているが、今までおおよその感じしかかわかっていなかった入館者の実態を数字で示せたところに意義があったと思う。

(山博学芸員補)

山と博物館 第19巻 第1号  
一九七四年一月二十五日発行  
発行所 長野県大町市TEL(026)221-1111  
印刷所 大町市大町山岳博物館  
大町市大町山岳博物館  
大町市大町山岳博物館  
定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)三二二九三